

安全な国産グリーン社会

SDGS Safety Domestic Green Society

第22回

グリーンの考察と要旨③

ーグリーンへの気づきと未来

一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

なるのです。」

はじめに

私たちがウェル・ビーイングな暮らしを求めることは、快適さの土台のうえにある。その背景に大事な要素には、美と感動であるといえる。その提供者は、自然である場合が多い。

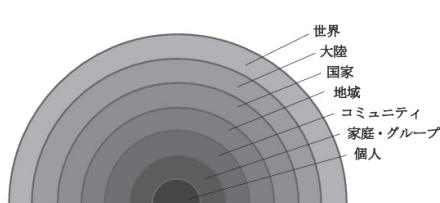
人工の場合には、芸術があり、絵画や音楽なども挙げられる。また、人間の心をくすぐる人工物には、科学技術に裏打ちされた「道具」がある。それは、機能が高まり「装置」と呼ばれ、さらにコンピュータが組み合わされ巨大化して「システム」と呼ばれたりする。

こうして、発展してきた結果、生活圏である地球に大きな影響を与えた。同時に、また人間と暮らしにも大きな影響と変化を与えた。そのため、絶えず対策や改善が行われてきたが、その前提には、子孫の存続が無意識としてあった。これは、人間として本性としても過言ではない。

▼レ切尔・カーソン

自然の大切さへの気づきを原点として、一生を捧げた科学者、レ切尔・カーソン（1907～1964）の言葉に次のものがある。

「もしもわたしが、すべての子どもたちの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー」（神秘さや不思議さに目を見はる感性）を授けてほしいとたのむでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまりまらな人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤と



社会の階層／ゾーンニング

メン」とも呼ばれている。前報に述べたが、これにも、多くのステークホルダーが介在する。そうすると、多くの立場の関わりが生まれる。しかし、私たちは、個人では生きていけない。したがって、IやMではなくWeやOurという意識が大事となる。確かに、人間としての存在は個人であるが、生きるという局面では、「みんな」でなければならぬ。上の図に示したように、コミュニティなど、社会としての連関がある。

それは、前述のように生き残りや存続、持続可能のためでもある。それには、現状に対する「気づき」が必要であり、「発見」である。身近な例では、宮崎県幸島のサルのように、若いある一匹から始まる。人間の歴史では、ダヴィンチやニュートンやアインシュタイン、あるいはピカソのように、ある一人の天才が造り手となる。アインシュタインのその名のようには、ある一石が波紋をつくり、社会や世界に伝播する。

レ切尔・カーソンの指摘が、公害という影響に気づきを与え、その後、「グリーン・レヴォリューション」という言葉が導いた。それは、当初は「グリーン・ムーブメント」とも呼ばれていた。その端緒は、公害問題は土地、水、空気という対象が向けられ、これこそが食生活の土台であるからである。前報に述べたが、これにも、多くのステークホルダーが介在する。そうすると、多くの立場の関わりが生まれる。しかし、私たちは、個人では生きていけない。したがって、IやMではなくWeやOurという意識が大事となる。確かに、人間としての存在は個人であるが、生きるという局面では、「みんな」でなければならぬ。上の図に示したように、コミュニティなど、社会としての連関がある。

▼グリーンイシュー／グリーン・ファティーク

グリーンイシュー

しかし、近年では、科学技術が生活の環境となり、コンピュータやインターネットによるデジタル化が普通となり、国内の範囲を超えて世界とつながり、絶対の距離感ではなく時間や意識としての距離感、つまり感覚としての距離感が、新たに形成されている。

結果、課題として、現実的には犯罪や偽装（フエイク）情報、偽装組織などが登場している。それは、暮らしや娯楽、趣味や活動の面から経済や産業となり、あるいはスポーツとなり、さらに選挙や政治の面でも常套となってきた。

気が付けば、そのシステムを維持するための電力やエネルギーが必要である。そして、新たな厄介な課題や問題が登場した。こうして、正義のグリーンを希求すると、課題も存在する。それはグリーンにおける光と影でもある。これは、グリーン・イシューとしての一面であるが、別名ではSDG（Sustainable Development Goals）と呼ばれる。実は、筆者も呼ばれる。実は、筆者のメジャー研究は金属疲労であったが、とくに厄介疲労である「フレット疲労（Fretting Fatigue）」を専門としていた。この言葉を冠して、Fretting Green Fatigue (FGF) と、筆者は呼ぶことにしたい。

上述のように多様なステークホルダーは、個々の立場での利害関係は、相互に広がり、波及する。その解決には、以下が挙げられている。①「地球」に配慮する。人間は地球の健康なしに繁栄できないのであり、これが最も基本的な倫理である。②世界の「人びと」に配慮する。人々が存続するために必要な資源を互いに供給する。③「余剰は分かち合い、消費と再生産には限度」を設ける。私たちが各々で必要なのを融通しあうことである。④「グリーン」という言葉は、エコロジーと資源を確保することである。これは、一般にSDGと一致する。そして未来に向かって「Green, No Life」と叫ぶの構築は、世界に共通するものであるが、土台のエコシステム／生圏は大陸や国や地域によって異なる。したがって、目標とするものは異なるが、実施は共通であるが、実施は地域性を「よ」としななければならない。それは、従来からキーワードとして唱えられている「シンク・グローバル、アクト・ローカル」に合致するのである。

▼まとめ

個人や地域での「ウェル・ビーイング」を求めることは目的とされる。地球に対して大きな影響を与える人間の存在は、偉大ではある。したがって、その面では、取り組みや行動が規制される。その面でも、美や感動、そして快適は十分に共存する意識を多くの人が共有することは可能ではないだろうか。それも人間だからの、原因と結果である。「グリーン」という言葉は、エコロジーと資源を確保することである。これは、一般にSDGと一致する。そして未来に向かって「Green, No Life」と叫ぶの構築は、世界に共通するものであるが、土台のエコシステム／生圏は大陸や国や地域によって異なる。したがって、目標とするものは異なるが、実施は共通であるが、実施は地域性を「よ」としななければならない。それは、従来からキーワードとして唱えられている「シンク・グローバル、アクト・ローカル」に合致するのである。

SDGと一致する。そして未来に向かって「Green, No Life」と叫ぶの構築は、世界に共通するものであるが、土台のエコシステム／生圏は大陸や国や地域によって異なる。したがって、目標とするものは異なるが、実施は共通であるが、実施は地域性を「よ」としななければならない。それは、従来からキーワードとして唱えられている「シンク・グローバル、アクト・ローカル」に合致するのである。